

*World's
Famous
Classics
92*

リチャード・ライ

ブラック・ボー

アメリカの飢

Richard Wright

BLACK BOY

AMERICAN HUNG

*World's
Famous
Classics
92*

全集

Wright

AMERICAN BOY AMERICAN HUNGER

イト／ト／ード・ライト／高橋正雄訳

・ボ・ボ
ツク・ボーイ／アメリカの飢え

世界文学全集——92

ライト

1978年10月24日第1刷発行

定価 860円

訳者 高橋正雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京 3930

製版所 株式会社まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社堅省堂



© KODANSHA 1978 Printed in Japan

Title : BLACK BOY

Author : Richard Wright

Copyright © 1945 by Richard Wright

Japanese language omnibus edition arranged with

Paul R. Reynolds, Inc., New York through

Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

Title : AMERICAN HUNGER

Author : Richard Wright

Copyright © 1944 by Richard Wright, Copyright © 1977 by Ellen Wright,

Afterword Copyright © 1977 by Michel Fabre.

Japanese translation rights arranged with Harper & Row, Publishers, Inc.,
through Japan UNI Agency, Inc.

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-410922-2253(0) (翻)

目次

ブラック・ボーイ	3
アメリカの飢え	271
解説・解題・年譜	398

写真提供|||高橋正雄／小野寺健／海老根宏

装幀|||アド・ファイブ

ブ
ラ
ッ
ク
・
ボ
ー
イ

『ブラック・ボーイ』『アメリカの飢え』主な登場人物

リチャード——本編の主人公。黒人というハ

ンディキャップと家庭の崩壊という不幸を背負い、幼い頃から苦難の道を歩む。一九歳の時年来の希望であつた南部脱出を果たし、理想に燃え共産党に入党するが、人間的自由を守りながら自分なりの黨員であらうとするため、脱党せざるを得なくなる。

エラ（エレン）——リチャードの母。当時の黒人女性としては珍しいほどの教養をもち、信仰心の厚い女性。夫と離別後二人の子供をかかえ苦勞する。

ナザニエル——リチャードの父。無学文盲の貧しい小作農。家庭をすて酒場で知りあつた女性のもとに走る。

祖母——白人に思えるほど色が白い。熱心な

キリスト教信者。

マギー叔母——リチャードの家族とシカゴで同居する、あかるくおしゃべりな女性。

アディ叔母——祖母の末娘。宗教学校教師。

エラ——祖母の家に下宿している黒人小学校教師。

モス夫人——メンフィスのビール通りの下宿屋の女主人。

ベス——モス夫人の娘。

ホフマン——シカゴのユダヤ人の食料品店主。

ロス——黒人共産黨員。「暴動扇動」のかどで起訴されている。

ハディ・ニールソン——国際共産黨員で黒人工作の責任者。

第一章

遠い昔、わたしは四歳だったある冬の朝、わたしはいろいろの前に立って、丸く盛ったまっ赤な石炭の上に手をかざし、戸外を吹きすさぶ風の音に耳を傾けていた。朝のあいだ、母は、静かにしていると、騒ぐんじやあないといつて、わたしを叱りどおしだった。そこでわたしは癪で癪で、むしゃくしゃして、居ても立ってもいられなかったのだ。隣りの部屋には祖母が病気で寝ていて、夜となく昼となく医者世話になっていたので、もしわたしがいうことをきかなければ仕置されるのはわかっていた。がわたしはじつとしていらなくて、窓のところへいくと、長いふわふわした白いカーテンを——けっしてきわるといわれていたカーテンを——うしろに引っぱって、人げない通りをうらめしそうに眺めた。そして走ったり遊んだり声を張りあげたりしたいとぼんやり考えていたが、ばさはさな黒い髪にくるまって、大きな羽根枕にのっている、年とった、白くて、皺くちやで、おっかない祖母の顔がまざまざと目の前に浮かんできて、わたしはぞつとしたのだった。

家の中はひっそりとしていた。わたしのうしろでは、一つ年下の弟が、床の上でおもちゃを相手におとなしく遊んでいた。鳥が一羽窓のむこうを飛んでいくのを見て、わたしは思わずバンザイ、と叫んだ。

「しずかにしてるだ」と弟がいった。

「お前こそ、うるせえ」とわたしはいった。

母が勢いこんで部屋にはいって来ると、ドアを閉めた。それからわたしのほうへやってきて、わたしに向って指をふった。

「あんな声をだすじやあないだ、いいだか？」と母は声を殺していった。「おばあちゃんが病氣なんだから、静かにしなきゃあなんねえだぞ！」

わたしはうなだれ、ふくれかえった。母は部屋を出ていったが、わたしはどうにも退屈でやりきれなかった。「だからおらがいったのに」と弟はいかにも得意げだった。

「うるせえや」とわたしはもう一度弟にいった。

わたしはつまらなそうに部屋をいったりきたりしながら、ほったらかしにされているのが癪で、なにかしてやりたいと思ったり、母が戻ってきたやしないかとびくびくしたりした。部屋には火のほかにはなに一つ心を惹くものはなかったの、わたしはどうとう、ちらちら光る燵の前にいくと、ゆれ動くほのおにうつとり見とれた。

と、新しい遊びが思い浮かび、それが心に深く根をおろした。なにかを火の中にくべて、燃やしてみたらどうだろう？ わたしはあたりを見まわした。そこにあるのは自分の絵本だけで、それだってもし燃やしたりすれば母にぶたれるのはわかっていて。じゃあほかになにかないだろうか？ わたしは捜しまわり、ついに押入れに立てかけてあった箒を見つけた。これがいい……箒の藁なら少しぐらい燃やしたって、だれもなんともいいやしない。わたしは箒をひっぱり出して藁を一握りもぎとると火の中にくべ、それが煙を出し、黒くなり、ぱつと燃えあがり、ついには白い灰の束になって消えていくのながめていた。その面白さといったらすぐには止められないほどで、わたしはさらに箒から藁をむしりとると火の中にくべた。弟がそばにきて、燃えさかる藁に目をまるくした。

「いけないだ、そんなことしちゃあ」と弟はいった。

「なんでだ？」とわたしはいいかえした。

「箒をぜんぶ燃やしちゃうじゃあないだか」と弟はいった。

「うるせえ」とわたしはいった。

「いいつけてやつから」と弟はいった。

「そんなことしたら、なぐるだからな」とわたしはいった。

わたしの考えはいよいよふくれ、勇ましくなった。そしてついに、もし藁の束に火をつけ、それをカーテンの下にもっていったら、あの長いふさふさした白いカーテンはどうなるだろうと考えはじめた。そんなことができるだろうか？ できるとも。わたしは箒から藁をいくらか引き抜いて、それが燃えつくまで火の上にかざした。そして窓のほうに走っていき、その火をカーテンの縁にくつつけた。弟が頭を振った。

「よすだ」と彼はいった。

だがすでに遅かった。赤い火がちよろちよろと白いカーテンに拡がっていき、ついではつとほのおが燃えあがった。驚いてわたしはあとずさった。火は天井まで燃えあがり、わたしは恐ろしさにふるえた。そのうち、黄色い光が部屋一面に拡がった。わたしはぎよつとした。叫ぼうとしたが恐ろしかった。弟を探したが、その姿は見えなかった。すでに部屋の半分が燃えていた。煙のために息はつまり、火に顔をなめられ、わたしは息苦しくなった。

わたしは台所のほうへ逃げたが、そこにも煙が渦巻いていた。もうすぐ母が煙をかぎつけ、火に気づいて自分をぶちにくるだろう。わたしは悪いことを、隠すこともごまかすこともできないようなことをしてしまったのだ。そうだ、逃げていって、もう二度と帰ってきまい。

わたしは台所から抜けだして裏庭へ走っていった。どこへいったらいいだろうか？ そうだ、縁の下だ！ そこならだれにも見つからないだろう。わたしは縁の下にはっていくと、煉瓦の煙突の暗い窪みの中へしのび込み、体をぎゅつとまるめた。母に見つかって、罰の鞭なんか受けて、たまるもんか。とにかく、なにかも偶然だったのだ。自分は家に火をつけようなんて思いはしなかった。ただカーテンが燃えたらどんなふうに見えるか知リたかっただけなのだ。そしてこの時のわたしは、燃えている家の縁の下にかくれている危険を思いつきもしなかった。

やがて頭の上で床をふむ足音がきこえた。ついで叫び声がきこえた。それから消防車の鐘の音と馬のパカパカいう蹄の音が通りのほうからきこえてきた。そうだ、本物の火事になったのだ。いつか見た、家を土台まで焼きつくし、煙突だけが焼け残って黒くつつ立っていた火事のように。わたしは恐ろしさに身をこわばらせた。頭上の轟音と共にわたしがみついていた煙突がゆれた。叫び声はいよいよ高まった。わたしは逃げだすこともできずに寢床に寝ている祖母の姿を思い浮かべたが、その黒い髪からは黄色い焰が立ちのぼっていた。母に火がついただろうか？ 弟は焼けただろうか？ おそらく家じゅうの者はみんな焼けてしまっただろう！ カーテンに火

をつける前に、どうしてそれに気がつかなかったのだろう？ わたしはこのまま見えなくなつて、死んでしまいたいと思つた。頭上の騒ぎはいよいよつのり、わたしはついに泣きだした。わたしはもうなん年も隠れているような気がした。そして足音や叫び声がきこえなくなる、わたしは悲しくなり、この世のそとに永久に投げ出されたように感じた。近くで人声がして、わたしはぶるつとふるえた。

「リチャード！」と、母が気遣いのように呼んでいた。

わたしは母の足とその着物の裾が裏庭をせわしげにいったりきたりしているのを見た。母のわめき声には苦悶がはつきり感じとれ、その苦悶のはげしさを感じるにつけ、わたしはそれに相当するだけの仕置を受けるだろうと思つた。と、わたしは母の張りつめた顔が縁の下をのぞいているのに気づいた。見つかった！ わたしは息をこらし、母が出てこいというのを今か今かと待つた。と、母の顔が消えたのだ。実は、母は煙突の暗い窪みにへばりついていてわたしに気がつかなかったのだ。わたしは両の腕で頭を抱えこんだが、齒はがたがたなっていた。

「リチャード！」

その母の声には、自分の体に鞭を受けたような、骨身にしみる悲痛が感じられた。

「リチャード！家は燃えてるだよ。ああ、うちの子を探してくんな！」

そのとおりだった。家はたしかに燃えていた。だがわたしはこの安全な場所をけつしてはなれまいと思った。

すると別の顔が縁の下をのぞくのが見え、それは父の顔だった。父の眼は暗闇に馴れていたにちがいない。なぜなら父はわたしを指さしていたのだ。

「あそこにいるだ！」

「いやだ！」とわたしは叫んだ。

「出てこい、この野郎！」

「いやだ！」

「家が燃えているだぞ！」

「おらを放つといてくんな！」

父はわたしのところへはってきて、わたしの一方の足をつかまえた。わたしはあらん限りの力で煉瓦の煙突のへりにだきついた。父は足をぐいぐい引っぱり、わたしはいよいよ夢中で煙突にしがみついた。

「出てくるだ、この馬鹿野郎！」

「放してくんな！」

わたしは足を引かれる力に耐えきれず、ついに指を放した。万事休した。わたしはなぐられるだろう。もうなにもこわくなくなった。どういふことになるかわかっていたのだ。父はわたしを裏庭に引きずっていったが、父

が手を放すやいなわたしは飛び起きて、自分のまわりにはいた人々をよけながら、通り目がけて一目散に走り出した。が、十歩といかないうちにつかまってしまったのだ。

それっきり、わたしにはなにがなんだかわからなくなった。泣いたり叫んだり夢中で話したりする声によつて、だれも焼け死にはしなかったのがわかった。弟はうろたえながらもどうにか母に知らせたらしかったが、時すでに遅く、家の大半が焼けていた。マットレスを担架がわりにして、祖父と叔父の二人が寢床から祖母を連れだし、隣家の安全な場所へ大急ぎではこんだのだった。長いあいだわたしの姿が見えず、声も聞こえなかったもので、しばらくは、だれもがわたしは焼け死んだものと思った。「お前はおらたちに死ぬほどの思いをさせたぞ」と、母はわたしの背中をなぐろうと、木の枝から葉をもぎ取りながら、おろおろ声でいった。

わたしは意識が無くなるほどはげしく、しかも長いあいだ鞭打たれた。わたしはついに気を失い、気がついてみると寢床の中にいて、泣き叫び、なんとしても逃げようとして、わたしをねかせておこうとする母や父とつ組み合いをしていた。わたしは恐怖のなかをさ迷っていた。あとで聞かされたのだが、医者によれば、医者はじつとねかせておくように、安静にしておくように、さ

もないと命が危いといったそうだった。わたしの体は火がついたようにほてって、とても眠ることなどできなかった。額の上には熱をさますために氷嚢がおかれた。が、眠ろうとすると、牝牛の大きな乳房のような、ぶらぶらした白い大きな袋が上の天井から垂れさがっているのが見えるのだった。そのあとで、いよいよ容態が悪化すると、昼のあいだ、はっきり眼を開いていてもその袋が見えて、それが今にも落ちてきて、なにか恐ろしい液体をわたしに浴びせそうで、恐ろしかった。のべつまくなしにわたしは母や父にその袋をのけてくれと、それを指さしたのみ、そんなものは見えやしないといわれると、いよいよ恐ろしさにふるえた。疲れきってわたしはうつらうつらと眠りにさそわれるのだが、すぐわあっと叫び出し、ふたたびはつきり眼醒めてしまい、眠るのがこわかった。だが日がたつにつれて、その恐ろしい袋もやつと姿を消して、わたしはよくなった。しかしそのあと長いあいだ、母が自分を殺しかけたことを思い出すたびに、わたしは身の引きしまる思いになった。

すべての出来事が隠語によって語られた。そして生活の折々に、その隠れた意味が徐々に明らかになってきた。山のように高い、黒と白のぶちになった一つがいの馬が、砂煙をあげてほこりっぽい道路をかけおりていくのを見た時、わたしはじめて驚異というものを感じ

た。

赤や緑の野菜の列が、日を受けながら明かるい地平の彼方まで長くまっすぐのびているのを見た時、わたしは喜びというものを感じた。

朝早く、濡れて青々した野中の道をかけおりていき、頬や脛に露がかかった時、私はほのかで冷たい官能の刺激を感じた。

ミシシッピ―河の黄色い、夢見るように流れている水を、ナツチエズ(ミシシッピ―州南部の、ミシシッピ―河畔の町)の緑したたる崖から見おろした時、わたしは無限というものをぼんやりと感じた。

もの悲しい秋の空を、いく列にもなつて南を指して渡っていく、雁の鳴き声に、わたしは郷愁のひびきを聞いた。

燃えるようなヒコリーの森の鼻をつく匂いに、なやましい憂愁をわたしは感じた。

田舎道の赤いほこりの中でころがりまわっている雀のささやかな誇りをまねたいという、じれったい、かなわぬ願いをわたしは感じた。

どこへとも知れずただ一匹で荷物を運んでゆく蟻を見ていると、自分も蟻になりたいような思いがわたしの心に拡がっていった。

半分地中に埋まった錆びたブリキ罐のなかにおずおず

とはいりこもうとする、弱々しい、青味がかつた桃色のざりがにをいじめながら、わたしは胸いっぱいの悔蔑を感じた。

見えない太陽から射す光に、あるいは黄金色に、あるいは紫色に燃えている雲の塊りのうちに、わたしは胸のうずくような栄光を見た。

漆喰を塗った木骨の家の四角い窓ガラスに映る、血のしたたるようなざらざら光る夕映えのうちに、わたしはゆれ動く驚愕を見た。

青い木の葉が雨でも降っているようにざわめくのを聞く時、わたしはもの憂い思いにさそわれた。

腐った丸太の暗い陰にかくれている白っぽい茸のうちに、わたしは解きたい秘密を見た。

鶏が父の手でばきと首を折られてから直滅法に飛びまわっているのを見る時、わたしは生きながらにして死の感じを味わった。

神様が猫や犬をその舌でミルクや水をなめさせるように造りたもうたのは、なんと素晴らしいたずらだろうとわたしは感じた。

つぶされたさとうきびからすき通った甘い汁がしたたるのを見る時、私は咽喉の渴きをおぼえた。

青い蛇が大儀そうにぐにやぐにやとぐろを巻いて日なたで眠っているのはじめて見た時、はげしい恐怖が

咽喉にこみあげ、わたしは血の気が引いてゆくような思いがした。

豚が胸を突かれ、熱湯につけられ、皮をむかれ、裂かれ、腹わたを出され、口を開け血だらけになって吊り上げられるのを見る時、わたしは口のきけないほどの驚きをおぼえた。

高い、苔むす櫓^{かた}の無言の尊厳に対して、わたしは愛というものをおぼえた。

夏の日射しのなかでそり返った掘建小屋のまがった材木を見る時、わたしは宇宙にひそむ残忍を見せられたような思いにかられた。

さわやかな雨にぶつぶつとたたかれた土ぼこりの匂いを嗅ぐたびに、わたしの口には唾がたまった。

刈られたばかりの液^よのしたたる草の匂いを吸う時、わたしは飢えというものをぼんやり知った。

そして静かな夜、黄金色の霧があたり一面に、降るような星空から地上へと流れてくる時、全身にひそかな恐怖のみなぎるのをおぼえたのだった……

ある日母が、わたしたちはケイト・アダムズという船でメンフィス^(テネシ州南部の都市)にいくことになったと告げた。そしてそれからというもの、早くいきたいあまり、一日一日が無限の長さに思えた。毎夜わたしは、あすの朝出発してくれればいいと思ひながら、床につく

のだった。

「その船はどれくらい大きいだい？」とわたしは母にたずねた。

「山ぐらい大きいだよ」と母はいった。

「汽笛はあるだかい？」

「あるともさ」

「汽笛はなるだかい？」

「なるだよ」

「いつなるだい？」

「船長さんがならそうとする時だよ」

「なんでケイト・アダムズっていうだ？」

「だってそれが船の名前だもん」

「どんな色をしてるだ？」

「白いだよ」

「どのぐらい船に乗ってるだ？」

「昼も夜もずっとだよ」

「船の上で寝るだかい？」

「そうだよ、ねむくなったら、そこで寝るだよ。さあ、もう静かにするだ」

なん日もわたしは広漠とした水面に浮かぶ大きな白い船を夢見てくらしただ。が、出発の日に母に連れられて堤にいつてみると、自分が想像していたのとは似ても似つかない、小さな、よごれた船を目にしたのだ。わたしは

がっかりして、いよいよ乗船の時になると泣き出してしまったので、母はわたしがみんなとメンフィスへいくのをいやがっているのだと思ったが、わたしには、母になんで悲しいのか伝えることはできなかった。しかし船の中をあっちこっちと歩きまわり、黒人たちがさいころを投げたり、ウィスキーを飲んだり、トランプをしたり、箱の上にねそべってぼんやりしていたり、食べたり、喋ったり、歌ったりしているのを見ると、わたしは悲しみを忘れた。父に機関室へ連れていかれると、わたしは震動する機械になん時間も見とれていた。

メンフィスでのわたしたちは煉瓦造りの平家の棟割長屋に住んだ。石造りの建物やコンクリートの舗道は、寒々として意地悪そうに見えた。青々とのびた植物がないこの町は、死んでいるように思えた。わたしたち四人、つまり母と弟と父とわたしの四人の生活の場所は台所と寝室だけだった。長屋の前も後も舗装されていて、そこで弟とわたしは遊ぶことができたが、しばらくのあいだ、わたしはこわくて、知らない通りへ一人ではいけなかった。

父の存在がはじめてはつきりと意識にのぼってきたのは、この家にきてからである。父はビール街のあるドラッグ・ストアで夜勤の守衛をして働いていたが、父が昼寝している時は騒いではいけないときかされた時、初め

て、父はわたしにとって偉い、近づきたいものになったのである。父はわれわれ一家の立法者であり、わたしはその前では笑うこともできなかった。わたしはいつもびくびくしながら台所の戸口にひそんでいて、父のどっかい体がテーブルにどっかりと腰をおろしているのをながめていた。父がブリキの桶からビールをごくごく飲んでゐる時、また長い時間どっさり食べて、溜息をつき、げっぷをし、目を閉じ、満腹してこっくりこっくりはじめる時、わたしは恐ろしげにその様子を見つめていた。父は大変ふとつていて、そのふくれた腹はいつもバンドの上にかぶさっていた。この父はいつもわたしにとって他人であり、いつでもどこかよそよそしく縁遠いものに思えたのである。

ある朝、弟とわたしが家の裏で遊んでいると、大声でしつこくニャーニャー鳴いている迷子の子猫を見つけた。わたしは二人はそれに食べくずをやったり水をやりたりしたが、それでもまだ鳴きやまなかった。

父が下着姿でいかにも眠そうにふらふらと裏口へ出てきて、静かにするようにいった。わたしたちが、騒いでゐるのは子猫だと話すと、父はそれを追いだしてしまえと命じた。わたしは猫を追っ払おうとしたが、そいつは動こうとしなかった。父も一緒になって、

「しっ！」と叫んだ。

やせこけた子猫はそれでもいこうとしないで、体をわたしたちの足にすりつけて、悲しそうに鳴いた。

「こんな畜生はぶつ殺せ！」と父がどなった。「なにをしてもいいだから、こいつをここから追っ払うだ！」

父はぶつぶついいながら中へはいっていった。わたしは父のどなり声にむっとしたが、その腹立ちを父に知らせることのできない自分がいまいなかった。どうしたら父に仕返しできるだろうか？ ああそうだ……父は子猫を殺せといったのだから、それを殺してやるんだ！ わたしには、父が本心から猫を殺せといったのではないのがわかっていたが、父にたいする深い憎悪がその言葉を額面通りに受け取るようにそのかしたのだ。

「とうちゃんは猫を殺せといっただ」とわたしは弟にいった。

「本気でそういったじゃないだよ」と弟はいった。

「そういっただ。だから、おらはこいつをぶつ殺すだ」

「そんなことをしたら、こいつはうなるだから」と弟はいった。

「死んじゃったら、うなることなんかできるもんか」とわたしはいった。

「とうちゃんは本気でこれを殺せなんていったんじゃないぞ」と弟はいい張った。

「そういっただ！」とわたしはいった。「お前だって聞

いてたじゃないか！」

弟はこわくなって逃げだした。わたしは縄ツ切れを見つけると輪をこしらえ、それを猫の首にそつとはめ、縄を釘に引っかけると、猫が宙ぶりになるまでぐつと引いた。猫は苦しがり、よだれを垂らし、くるくるまわり、体を折り曲げ、苦しまぎれに空を引っかいたが、ついに口を開けてうす桃色の引きつった舌をつきだした。わたしは縄を釘にゆわくと、弟を探しにいった。弟は建物のすみにかくれてうずくまっていた。

「殺しちゃったぞ」とわたしはそつといった。

「悪いことをしただな」と弟はいった。

「これでとうちゃんが眠れるだよ」とわたしはすっかり満足していった。

「とうちゃんは本気であれを殺せなんていったんじゃないだ」と弟はいった。

「じゃあなんでおらに殺せていっただ？」とわたしは問いつめた。

弟はそれに答えることはできず、ぶらさがった猫を気味悪そうに見つめていた。

「あの猫があんちゃんを喰いつきにくるだから」と弟はおどかした。

「あいつはもう息だつてしてないだ」とわたしはいった。

「おらはいいつけてやるだ」と弟はいつて、家のほうへかけだした。

わたしは父がはずみで思わず口にしたあの時の言葉を楯にしてわが身を守つてやろうと決心し、その言葉が腹立ちまぎれにいわれたのはわかつていながら、それを父にたたき返してやる喜びをひそかに味わいながら、待ちかまえていた。母がエプロンで手をふきふき、わたしのほうへ走ってきた。そして縄からぶらさがっている子猫を見ると、はつと足をとめて顔色を変えた。

「一体、お前はなにをやらかしただ？」と母がきいた。

「あの猫が騒ぐもんで、とうちゃんが殺しちゃえつていっただ」とわたしはいいわけした。

「この馬鹿野郎！」と母はいった。「こんなことをすりゃあ、とうちゃんにしばだかれるぞ！」

「だけんどうちゃんが殺せていっただ」とわたしはいい返した。

「だまるだ！」

母はわたしの手をつかんで父の枕元に引っばつていくと、わたしのしたことを話した。

「そんなことするやつがあるか！」と父はどなった。

「だつてとうちゃんは殺せていっただ」とわたしはいった。

「おらはただ追っ払えつていっただけだ」と父はいった。

「とうちゃんは殺せていっただ」とわたしはあくまでもいい返した。

「はっ倒されないうちに、こつから消えうせろ！」と父は胸くそ悪そうにどなって、寝がえりをうった。

わたしははじめて父に勝ったのだった。わたしは父に、その言葉を文字通りに受けとったものと信じこませた。父はもしわたしを罰するとすれば、その権威をきずつけざるをえなかった。わたしははじめて父に対する非難をその顔にたたきつけることができたので嬉しかった。わたしは父に、もし猫を殺したためにわたしを鞭打てば、わたしが二度と父の言葉を尊重しなくなるだろうと、感じさせたのだ。わたしは父に、父は残酷なんだと、だから自分が猫を殺しても鞭をうけなかったのだと感じていることを、思い知らせてやったのだ。

だが母は父より頭が働いたので、わたしの多感な心を刺戟して仕返ししようとし、一つの命をうばうことが道徳的にどんなに恐ろしいことを思い知らされて、わたしはまいった。その午後いっぱい、母は意地の悪い言葉をわたしに浴びせ、わたしは自分のしたことに復讐しようとしている目に見えない一群の悪魔の幻想にとりつかれた。夜になるにつれて、不安はいよいよつのり、わたしは一人でだれもいない部屋にはいるのがこわかった。

「お前のしたことはどうしたって許されないだよ」と母はいった。

「ごめん」とわたしは口のなかでいった。

「ごめんていったからって、あの猫が生きかえりやしないだ」と母はいった。

それから、いよいよ床につく間ぎわに、母はぞつとするような命令を口にした。母は暗闇の中へ出ていって、墓を掘って子猫を埋めろといいつけたのだ。

「いやだ！」とわたしは叫んだ。外へいったら悪魔にさらわれると思ったのだ。

「さあ出ていって、あのかわいそうな猫を埋めてやるだ」と母は命じた。

「おら、こわいだ！」

「そいじゃあ、お前があゝの縄を首にかけた時、猫はこわくなかったっていうだかい？」と母がいった。

「だけんどあれはたかが子猫だもん」とわたしはいいわけした。

「だけんど、あれだって生きていただ」と母はいった。

「お前にあれを生きかえらすことができるだかい？」

「だけんどうちやんが殺せていっただ」と、わたしは良心の苛責を父に転嫁しようとしていった。

母は手の平でわたしの口をびしゃつとたたいた。

「だまるだ、この嘘つきめ！　とうちゃんのいった意味